

# 第1回「日本語大賞」

テーマ 「人と人をつなぐ日本語」

高校生の部 最優秀賞 受賞作品

## 「ある職人のことば」

東京都

東京大学教育学部附属中等教育学校 6年

岡部 憲和

ある職人のことば

東京大学教育学部附属中等教育学校 六年

岡部 憲和

中学二年生の時、中越地震が起こり、新潟に住む多くの人々が、苦しみました。しかし、九十歳の女性が、わき目も振らず、震災の翌日から働いていました。苧績み職人の、片岡八ナさんです。僕は、このことを新聞報道で知り、どうしても会いたくなり、片岡さんへの手紙を書きました。そして、多くの被災者の方の協力で、地震から半年後に、手紙がご本人に渡り、僕は会えました。あれから、行き来が始まり、僕は、いつのまにか、先生の弟子のような存在になっていました。

昨年の秋、先生が他界なさいました。僕は、先生の寝顔を拝見しに、伺いました。すると、ご家族の方が、こう言われました。

「大丈夫。母は、いろんな人に、糸の作り方を教えて来たから。小千谷縮は、大丈夫」

すると突然、先生の糸を紡ぐお姿が、僕の眼前に浮かんで来ました。

「お宅さんが、お手紙の。ありがとう。涙出ました。ありがとう」

九十歳の、『現代の名工百五十人』に入る達人が、見ず知らずの中学生に、深々と頭を下げてくださいました。しかも、手まで合わせておいででした。僕は、ワーツと泣きたいのをこらえて、深々とおじぎをしました。

先生のお仕事は、苧麻（ちよま）と呼ばれる上質の麻を、長さ五十センチメートルほどの細いひもに裂き、口で湿らせた後、指ですり合わせて、一本の糸にするものです。『苧績み（おうみ）』と言います。この糸を丹念に織ったものが、『小千谷縮』です。先生は小千谷縮のもとになる糸を作っていたらっしゃるのです。

先生は、麻の細いひもを口で湿らせた後、九十歳とは思えないほどの、指の動きで、すばやく、親指で、ひもとひもを繰り返して行きました。そして、その度に、ほんとうに細い糸が、少しずつ少しずつ、入れ物にためられて行きました。

どの位、時間が経ったでしょうか。僕は、何度も、先生に声をかけようと思いました。しかし、仕事中の先生には、隙が全く無く、声がかけれません。でも、僕は、勇気を奮い起こして、尋ねました。

「どうして、苧績みを震災翌日から続けられたのですか」

先生は、口に糸をくわえ指だけ動かしながら、答えてくださいました。

「何もしないよか。それで、やらしてもらった。言うてみれば、この仕事は、人の邪魔にならねえもの」

僕は、自分の耳を疑いました。人に迷惑がかけられないから働く。僕には、とても言いえないことばでした。

先生は、左てのひらに右てのひらをのせて、何か考えている様子でした。そして、急に、僕に、棚にのっている箱や、新聞の包みをとるようにおっしゃいました。それらの中には、原料の芋麻や、先生が見つないだ七百グラムほどの糸のかたまりが入っていました。先生は、実物を一つ一つ示しながら、僕に、糸の紡ぎ方を教えてくださいました。芋績みの達人が、仕事の手を休めて、わざわざ、僕に説明してくださいました。僕は、その時、全く指紋のない指、細く紫色をした唇に気づきました。八十年の職人の歴史が、これだと思いました。

先生のことばには、仕事に対する片意地など微塵もありませんでした。しかし、控えめであればあるほど、そして、指の動きの速さを見れば見るほど、強い信念と自信が、感じられたのです。

「縮は、全部手でやらなければ、文化財にならん訳ね。その仲間に入れてもらっている」そのことばを聞いて、僕は、さらに驚きました。糸づくりの第一人者が「仲間に入れてもらっている」と言うことばに。僕は思いました。このような芋績み職人がいる限り、小千谷縮は、絶対不滅だと。

眼前に眠る先生のお顔は、明るく、微笑をためておいででした。

「おや、よく来たね。こうやって、芋績みをしていたら、急に、眠くなって倒れた。熱があってね、麻疹だって。」

それで、病院に連れて行ってもらった。すぐ入院。でも、薬飲んだら楽になって、また、芋績みをしていた。時たま、先生におこられるけどね」

そんなことばが聞こえて来ました。

地震にあっても、病気になっても、仕事をし続けた職人、片岡八ナ先生。九十五歳を目前に控えての大往生でした。もう、先生の指も唇も拝見することはできません。しかし、僕の心の中で、先生のことばは、ずっと生きています。

「この仕事は、人の邪魔にならねえもの」

小千谷縮。重要無形文化財。片岡八ナ先生は、ご自分の働く姿と、信念のこもったことばを残し、亡くなられました。でも、先生の遺志は、小千谷縮に宿ったと信じています。